

勝林寺報

和合の海

元の本願寺総長豊原大潤様から

同入和合の海

の揮毫を軸にしたて贈つてもらいました。

この言葉、

同じく和合の海に入らん

ということばは、お釈迦様のいらっしゃった当時から、仏のみ教えを仰ぐ人達が、合掌のすがたでとなえたことばであろうと思われます。いわゆる三帰依文

の一節です。

三帰依とは、「わたしは目覚めた人ブッダ(仏)と、そのブッダの説かれた真理(法)とをよりどころにして、みのりの友の和合(僧)を大切に生きることをと念じます」と言う、仏教徒の唱えことばです。

いまこの「同入和合の海」という句は、中国の善導大師という方が、昼夜六時によつたう「六時礼讃」(往生礼讃)のなかにも述べられている言葉です。

「みほとけのおしえの中で私は、差別対立のない和合の世界に、共に生きたい」

意味があります。

三帰依は、「わたしは目覚めた人ブッダ(仏)と、そのブッダの説かれた真理(法)とをよりどころにして、みのりの友の和合(僧)を大切に生きることをと念じます」という、仏教徒の唱えことばです。

「五濁惡時の群生もものがただよい生きる海」、それがそのまま「弥陀本願の(はたらいてくださる)海」なのです。

「凡も聖も逆惡の人も、法を誇る人さえも、等しくこの本願の海に回入すれば、あたかも衆水、海に入りて一味なるがごとし」と親鸞様もうたわれるのです。

同入和合の海

佛教徒が三千年来、念じつけた言葉です。

いまは亡き豊原総長さまのおこころを、勝林寺門徒、心して聴聞しなければなりません。

蓮如上人のお念仏のご教化についてであります。その上人の五〇〇回忌のご法要が平成一〇年に本山でつとまるということでした。予定されていた案内審議のなかでも、ことに今年は「門主さまのご巡教もある」ともあり、「役員まかせ」ではなく、全会員の協力で動く、勝林寺仏婦のよき伝統を發揮することが期待されました。年間会費・ダーナ献金・阪神大地震救援金の集金も順調でした。

勝林寺住職 西池 哲俊
門徒総代一同
佛教婦人会役員一同

三月のこよみ

五日

正法寺道場仏壇遷座
森戸義則氏宅忌明法要

二日

兼井儀正氏宅法事
法輪会春季研修

九日

玉日会
足立幸夫氏宅納骨式

三日

得度修礼
玉井克弥氏宅祥月

六日

十六夜会
春彼岸中日

十四日

有志『聞法会』(榎見公民館)

二十一日

勝林寺春彼岸中日

二十二日

山田隆久氏宅法事

二十三日

渋谷厚志氏宅法事

二十六日

中嶋庄二氏宅法事(白寿祝賀)

二十七日

△口同般仪会

二十八日

長嶋寺様二三回忌法事

二十九日

△口同般仪会

三十日

△口同般仪会

三十一日

△口同般仪会

三十二日

△口同般仪会

三十三日

△口同般仪会

三十四日

△口同般仪会

三十五日

△口同般仪会

三十六日

△口同般仪会

三十七日

△口同般仪会

三十八日

△口同般仪会

三十九日

△口同般仪会

四十日

△口同般仪会

四十一日

△口同般仪会

四十二日

△口同般仪会

四十三日

△口同般仪会

四十四日

△口同般仪会

四十五日

△口同般仪会

四十六日

△口同般仪会

四十七日

△口同般仪会

四十八日

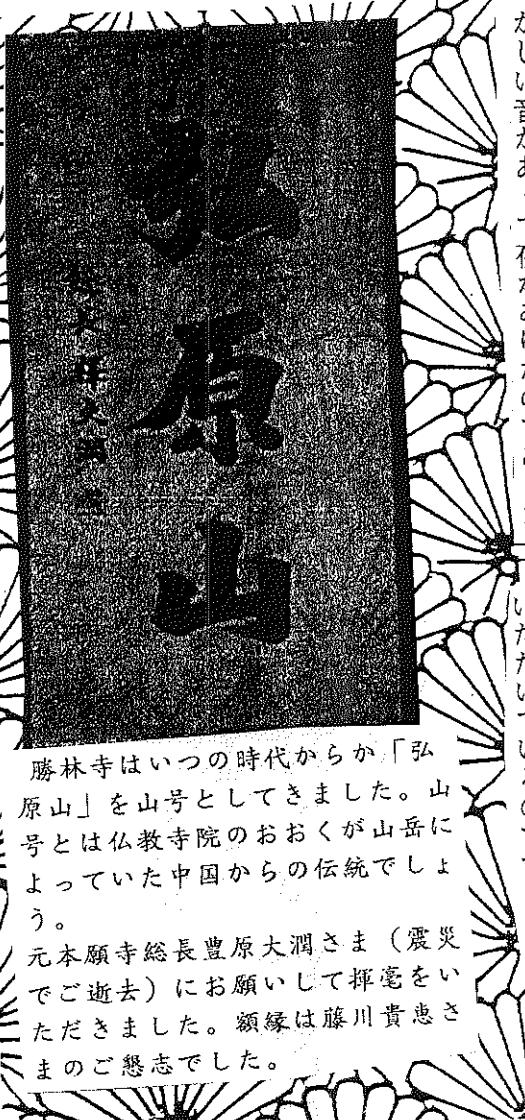
△口同般仪会

四十九日

△口同般仪会

五十日

△口同般仪会



勝林寺はいつの時代からか「弘原山」を山号としてきました。山号とは仏教寺院のおおくが山岳によっていた中国からの伝統です。

元本願寺総長豊原大潤さま(震災でご逝去)にお願いして揮毫をさただきました。額縁は藤川貴恵さまのご懇意でした。

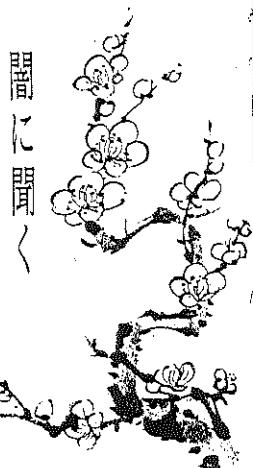
「闇」という文字は、音が閉ざされているということ。
真実の音、本当の音が、閉ざされてしまつて、聞こえなくなつてゐることを示すのが、あの闇という文字。

たとえば、かつて昔には「朝の音」があつた。家の雨戸をくる音。鶴の声。せかせか走る主婦たちの駒下駄の音。そしてカラカラつるべの音。そんなすがすがしい音があつて夜があけたのであつた。

前住職の葬儀には、当時総長の激務をさいて会葬くださいましたし、現住職に對しても慈父のようなご親切を数々いただいた方がありました。
その豊原総長のありし日のご法話を、いまさらながらの思いで思いだしております。

先の阪神大地震で亡くなつた元本願寺総長豊原大潤さまは、もちろん宗門にとてもかけ替えのないお方であると同時に、勝林寺にとつても深い御恩をいただいた方がありました。

闇に聞く



いまは、いまの朝は、そんな音はないかも無くなり、ただ朝っぱらからのあのオートバイのエンジンの響だけ。

このようなことは、家庭でも起こつてゐる。家族の間を結ぶ眞実な声。たとえば「おはようございます」とか「ありがとうございます」とか「すみません」「いただきま

す」とか。とかくそんな暖かい家庭の音が、いつのまにか家庭から消えて行つてゐるのではないか。

震災に遭つて (震災地からやっと届いたおしらせ)



「門」の向こうに、閉ざされ消されてしまつた眞実の音を、「門」に耳をつけてしまつていかなければというのが淨土真宗のおすすめではないのか。

久遠の昔から呼びどおしの如来さまのお呼び声を、我執煩惱、浮世世渡りで閉ざしている。

閉ざしている煩惱を無くせとおっしゃるのではない。いやその煩惱のなかに耳をつけ、こころをすませて、いまも呼び通しの眞実の声を聞いていこうとお進めください。それが親鸞様のご親切ではな

いのか。

とつとつと語られた豊原様のその日のご法話を、いまさらながら思ひだせていただいているのです。

大変なご心配をおかけしましたが、幸い、食器類のようなものがめちゃめちゃに壊れ、多少壁に亀裂がはいつたぐらいで、家族の者はけがもなく済みました。

80才過ぎの母も、あのときは一番落ち込んでおりまして、ご本山からの仏様をしつかり抱いて、一人で避難致しましたほどで、さすがおばあちゃんと驚嘆させられたほどでございました。

しかしあれから約半月、しばしば震つてくる余震におびえながら、避難所でくらしてございました。

ここでも祖母は、風邪も引かず、元気

ところが今度の地震で、だれもだれもスッテンテんになつてしましました。みんなが同じみじめなものになつて避難所に集まりました。そうしたらその避難所で、みんな兄弟親戚のようなこころどころのつながりができて来ました。

一月末の避難所の夜の冷え込みはつるうありました。それにこんなことばが書いてありました。

お寺さまからのお見舞い『寺報』が届いていました。それにこんなことばが書いてありました。

花は地上で妍(あでやかさ)を競うが根は地中でふかくからまりあう。

正義の主張は争いを起こすが慚愧のところで人はふかく結ばれあう。

見栄と権利主張でのつきあいは砂をかむようなものだが、見栄も外聞もかまつておられぬ浅ましい者どうしの裸のつきあいの、なんとあつたかく懐かしいこと。

おばあちゃんは、「これが親鸞さまの御同行という世界のことやで」と申します。震災にあって、私、ほんとうの人間のありかたに、ゆきぶり起つたれ気づかされた事であります。

月例会で 仙壯の信偈

赤穂北組

森下教尚

兵庫教区門徒推進員連絡協議会